国立国語研究所学術情報リポジトリ

As regards the construction of a head and a lead sentence of newspaper

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-02-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 斎藤, 秀紀, SAITO, Hidenori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001783

新聞の見出しとリード文の構造について

斎　藤　秀　紀

§0　はじめに

昭和41年度より始められた新聞を対象とする大量の用語用字調査は，その第一段階を終了し，第二段階とも言える分析処理に入りつつある。第一段階の作業の主たるものは，語彙表，漢字表等，主に分析に使用される語彙表，漢字表の作成に重点が置かれていたが，当然これらの作業のみで語彙調査の全てが終了したと言うことはできない。これらと対になる分析が必要となることは言うまでもない。しかし，従来の語彙調査の調査対象が主に雑誌類について行なわれていたのに対し，新聞という新たな分野の調査に関して種々の問題が生じている。たとえば雑誌と比較して新聞特有の文体，また構造等，また時間と共に変化するニュースの価値等，種々の点で従来の調査対象であった雑誌と異なる面が多い。本稿では，直接これらの問題の解説を述べるものではないが，それらのポイントをさぐる目的を持って，新聞の大きな特徴である見出し，リード文の関係について，またこれも特徴の一つであると言われている５Ｗ１Ｈの分類方法を使い，分析の概略を述べることにする。そのため，対象となる例文も極力少なくとってある。この論稿ではデータの扱いが非常に主観的であり，従ってあくまで今後の分析のための問題点を探ることを目的とする。

§1　分析対象

この分析に使用したデータは，昭和41年度朝日新聞朝刊のうち２月５日～２月17日までの13日間の中から第１面の記事のみを収集した。対象となる事件は，この後連続して発生するのであるが，航空機事故のうち最初に起きた「全日空機，羽田沖墜落事故」をとった。直接対象としたのは、13日間のうち，９日間分である。この間に記事が連続していないのは，この事件と同時にアポロの成功

をつたえるニュースが入ったため　第一面がこれらの記事によってうめられたことが原因である。また，この記事は今日の新聞の語彙調査の資料範囲とも一致させてあるため．後にサンプリング調査による語の収容状態と比較することが可能である。

その他，この事件を分析の対象とした理由は，一人の作業量として適当であろうと思われたこと，一応事件としては一つのまとまりを持った終了状態があること，政治問題等の複雑にからんだ裏の論理，背景を前提に記事を読む必要がないこと，等の点によるものである。また第一面のみ対象としたのは，いわゆる三面記事のたぐいは　この事件では主に生存者関係，遺体収容のリスト等が主であったこと，記事の重要度の高いものは一応第一面記事とするため，その日々の記事のまとまりは，第一面によって言いつくされていると思われたためである。また夕刊を省いたのは主に量が増えすぎたためであり，後に分析の対象として朝刊と比較することも可能であろうと考えたためである。

一般には新聞を特徴づけるものとして記事，見出し，広告等が他の雑誌類と大きく異なるものとされているが，波多野完治氏は著書「現代文章心理学」の中で，およそ次の様な分類を行っている。

表示性，圧縮性，感動性，品位，審美性

これらの分類は新聞の見出しが持っている五つの様態として述べられているのであるが，本稿ではこれらのうち，新聞の見出し，本文のニュースの記事の書き方の特徴とも言える５Ｗ１Ｈに分類する過程を述べる。これらの主なものは新聞文章の大きな特徴ともなっている逆ピラミッド構造を持つ５Ｗ１Ｈの書き方であるが，分解していく過程で，かならずしも確定できる項目になるとは言えない。特に見出しの場合，限られた範囲の字数でより多くの意味とニュース性を伝えるためには，それなりに重複した意味の表現がとられることが多い。以上の点から，これらのうち見出しについて限定し，その付属としてリード文を扱う。また，見出し，及びリード文を選んだ理由として次の３点をさらにつけ加えておく。

１．情報伝達を主とし，文法的表現にあまりこだわっていないこと。

２．日本語の場合，漢字による直接的な意味伝達が可能であり，構文的（文

法的）に処理される以前に視覚的に意味の把握が実際上可能となっていること。

3．語の意味または情報の伝達は、あるニュースの第一報があってから、第二報，第三報と時間がたつにつれて情報の対象，また見出し表現に省略現象がおきてくると思われること，またその時点での話題の中心が事件そのものよりそれらに関係することがら，付属的なこと，また事件の過程的なことがらに中心的話題が変化すること。（一つは見出し語の表現の際，極力短くすること〈圧縮性〉、簡明であり，かつ読者の視覚にうったえる要素が強いからとも思われる）

§2　分類の問題点 1

5 W 1Hとは，時（when），場所（where），人（who），物（what），状況（how）理由（why）であるが，かならずしも明瞭な分類ができるとは言えない。例えば，語の単位によっては，意味の組合せによって一文の範囲でおよその意味が確定するもの，また二文以上にわたり重複した意味を持っているもの等がある。そのための単語の単位を固定してしまうのはかならずしもよいとは限らない。むしろ最初に一文を大づかみに捉え，後にそれらの関係をみながら意味結合をまとめて行く方法がよいと思われる。以下一例としてそれらの問題となった部分をひろってみる。

（2月5日　事故発生第1報リード文から）

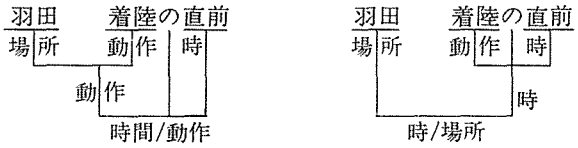
4日午後7時1分，全日空の千歳発羽田行第60便ボーイング727旅客機が，羽田着陸の直前，消息を断った。

事故の第一報を伝える見出しのリード文の構造では，見出しを受け，ある「報道の対象」が「どのように」「どうした」の構造を持っている。

時	4日午後7時1分
物（事がら）	全日空の千歳発羽田行第60便ボーイング727旅客機が，
状況	着陸の直前，消息を断った。
場所	羽田
理由	

ここで問題となるのは，残された「羽田着陸の直前」の扱いである。これを

文脈から切りはなして解釈しようとすると，



となり，全日空機が着陸体制に入った時に事故を起こしたことが推定される。しかし，この様に解釈すると，意味としては「場所」を表わす語が省かれたことになり，第一報のリード文としては事故の「場所」を明示する表現が失なわれ非常にまずいことになる。そこでこの場合5W1Hのうちセンテンスの重要部分である「場所」を表わすものとして「着陸の直前」は動作状況を示すと共に，読者に対するニュース報告ということから「場所」に力点をおいて解釈する方が妥当だと思われる。

他の一例として同様に

羽田着陸の直前，東京湾に墜落した全日空ボーイング727旅客機の遺体捜索は夜を徹してつづけられ～

「直前」の語の用法は墜落にかかると思われるが，前出の同句の用法に対し，「着陸動作の直前の時」東京湾に墜落した，「時」を表わす意味が強い。この場合も前述の方法をとってみる。

時	羽田着陸の直前
場所	東京湾に墜落
物（事がら）	全日空ボーイング727旅客機の遺体捜索は
状況	夜を徹してつづけられ～

この場合は前述の同一語形のものと，それらの使用される文脈によっては分類される項目が異なる例である。また次の場合はどうであろうか。

全日空機　羽田沖で墜落

133人が絶望

着陸寸前，海中へ

時		着陸寸前
場所	羽田沖	海中へ

物　　全日空機

人　　133人

状況　　墜落　　絶望　（着陸寸前）

同様に，この場合も「着陸寸前」の解釈が問題となる。意味的には「着陸」は「寸前」にかかるものとして「着陸寸前」の意を全日空機が，ある一連の動作である「飛行状態」のうちのある時と解釈すべきか，また一連の動作の継続中の事故とみるかによって「時」または「状況」に判定が分かれる。また同一語形で状況と物またはことがらに分かれて分類されるものとして，2月5日，および2月7日のリード文より

～機体の一部を発見　墜落が確認された。

何　　どうした

東京湾に墜落した全日空のボーイング727旅客機～

場所　状況

次の問題として「理由」を表わす場合の問題をあげてみる。例は最初の見出しである。「墜落」「133人が絶望」との関係は因果関係の面からみると二つの場合が考えられる。その一つは，結果としての「墜落」の原因，他の一つは，「133人が絶望」を説明する理由である。前者の場合，明らかに原因追求の事故調査をまたねばらない場合が多く，特に生存者のいない状況では早急な解決は無理である。しかし，後者の場合「133人が絶望」の原因としては，「海中へ墜落」したことがあげられる。ここでは，この見出しおよびリード文の段階では，因果関係に関する説明は表面上はニュース報道の重要性から見て，第一に全日空機の墜落事故の報道，第二に乗客の生存者の確認であろう。この二点の重要度とあわせて考えるならば，むしろ「133人が絶望」の理由として「全日空機の墜落」を説明することが妥当だと思われる。次の例も同様に一センテンス内での因果関係の表現されたと思われるものである。

2月5日　　～を発見，墜落が確認された。

２月８日　　遺体13体を発見，収容した。

物　状　　状況

理由

この二例の場合，後者の例では「収容した」理由となる「何を」＋「どうした」の「何」が省略された形であるとすると，この二例は同一のパターンとなる。この様にある現象の原因，結果とその理由を表現するパターンは，一センテンス内では「物または事がら」を「どうした」の形で前の意味単位を受けて，その理由または原因を表現する方法がとられることが多い。また次の例は二つのセンテンスにまたがって原因結果の表現がなされている場合である。

１）明らかに～機体の一部，座席などを発見，墜落が確認された。

２）つづいて遺体も発見，収容されはじめ，133人は全員絶望となった。

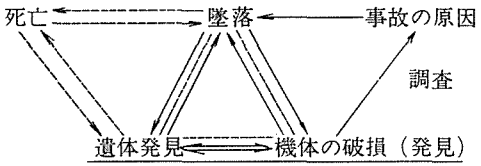
物　状況　状況　　人　状況

Ｘ１　　Ｘ２

Ｘ２の理由としてＸ１があること，次に「全員絶望」をより明確にする理由の一つとしては，前出の１）の文に「機体の一部，座席などに」がこれをよりはっきりさせることになる。

次に他の理由として，「遺体の発見，収容～」の過程は１）の文と重複するが，捜索の過程に生存者の発見ができなかったことも暗黙のうちに述べられているものと思われる。この一文のみを解釈の対象とした場合に，Ｘ１はＸ２で述べられている事がらの直接の原因ではない。むしろ遺体の発見のみではなく，複数の遺体が次々と収容されたために「全員絶望」の部分をより強める様に表現されている。墜落したために機体の一部，その他が出る，という仮定によって逆に機体の一部またはその他の類を発見することによって墜落を確認することの重要な要素となる。また同様に捜索による死者と生存者の確認のためには機体がばらばらになる状態と遺体の発見が連続して行なわれることにより絶望の度合いが深められる。この例は同一の仮定にもとずく事故の報道主題の確認の過程と遺体発見による全員絶望と生存者の可能性を持たせつつ，絶望と表現することによって，非常に確定された状態であることを暗示し，全員死亡の意味として表示している。これをさらにまとめて関連図に書いてみる。

第一報リード文の構造



この図から考察できることは，この第一報のリード文全体はこれ以後に続く報道の概略を示していることがわかる。同様に２月５日から17日までの見出しの主題のみを追ってみた場合，同一のパターン構造を持っている。これは見出しの出現状況を日付ごとに分類し，単語の使用状況を調べることによってもニュースの報道の概略はつかめるが，リード文の第一報の構造がニュース報道全体と同一構造である点，事件報道の一つのパターンであることが予想される。

全日空機墜落事故報道全体のリード文

2.5　事故発生／機体発見による生存者の確認／墜落の確認

2.6　遺体収容捜索強化とその方法

2.7　機体回収

2.8　遺体，機体回収状況

2.9　機体状況

2.13　機体状況詳細

2.14　〃

2.16　機体回収ほぼ終了

2.17　事故調査団による原因調査

次に，「見出し」の時間的な変化について，同様な方法で構造の類似関係を調べてみる。まず最初にそのパターンをあげ，さらにその方法について説明する。

この構造は明らかに前述の事故報道の第一報のリード文中の構造，また２月５日から17日までの報道の経過の構造と非常に類似したパターンであることがわかる。これはリード文と見出しの関係から当然推定できることであるが，特に見出しの場合，リード文の説明的な記述に対し，視覚的な把握が可能な点に特徴がある。さらに見出しの他の特徴として極力情報を多く持ち，記述として

表1

月日	機体関係			遺体関係		その他
2.5	全日空機(2)			133人絶望(2)	墜落 (1)	羽田沖 (1)
6				遺体捜索(3)	残る104体(2)	測量船掃海両隊繰り出す (2)
7	胴体発見(3)	遭難機 (2)				羽田東11キロ (1)
8	右エンジン(2)	全日空機(2)		遺体発見(3)	43人に (1)	見えず (3)
9	機体状況ほぼ判明 (1)		各部東方に向い散乱(2)	全日空機の遺体収容(2)		きょう完了をめざす(1)
13	爆発の跡見られず (3)	遭難全日空機 (2)	中央エンジン (2)			全日空機遭難から10日目 (2)
14	操縦席胴体あがる (3)	初めて計器類を回収(3)	原因追求の有力手掛り(2)			残る (1)
16	機体回収ほぼ終る (2)	右エンジン(1)				
17	きょうから機体調査(1)	本格的原因究明 (1)	全日空機事故調査団(1)			

は圧縮性に重点がおかれていることである。そのため，ある見出しの意味がどの部分に重点がおかれているのか，ニュース性の重点報道はどの部分にあるのか等通常の報道される見出しのみでは，はっきりしないことが多い。特に重複した意味情報を意識的に表現している場合，ある一定の手順に従って分類しようとすると曖昧さの点で問題がある。また視覚的に把握可能な表現の方法と，見

出し独特の名詞表示の多い場合，語の文法的な表現よりもむしろ独立した意味単位の語そのものの順序性が理解の上では重要であると思われる。さらに見出し自体がリード文，本文に対してキーワード的性格を持ち，情報伝達の最小要素の集まりであるとするならば，いっそうこの点をうらづけるものとなろう。この処理では主観的な操作ではあるが，試みとして機械的な組合わせによる方法で行なった。もちろん，見出しの意味単位をどこに置くかによって，単語をいくつの部分に分割するかの問題が生じ，ある一定の組合せをとった場合，意味として通じるもの，通じないものの選択が生じ同様にこれも主観的な操作となる。

2月5日見出し

全日空機　羽田沖で墜落　133人が絶望

a. 全日空機

b. 羽田沖

c. 墜落

d. 133人が絶望

a b	全日空機　羽田沖		b c	羽田沖墜落	
a c	全日空機　墜落		b d	羽田沖	133人が絶望
a d	全日空機	133人が絶望	c d	墜落	133人が絶望

一応意味または見出し構成として成立するものは　a c，a d，b dとし，この見出しを構成する語の重複度を調べると次のようになる。

全日空機（2）　墜落（1）　羽田沖（1）　133人が絶聖（2）

この様にして操作的に作成したものが表1の関連図である。カッコ内の数字は重複度または意味として一応まとまりのつくものが他の見出しとの結合を含め出現が2回であったという意味である。この方法の妥当性は前に述べた通り見出しの表現の簡潔性が逆に意味の重複，さらに他の単語との意味結合を多くするのではないかと思われたからである。これはさらに次の処理を行う場合に有効であると思われる。『5 W 1 H』に分類する際，特にwhy（理由）を表わす場合の扱い方が他と異なる点が多いこと，リード文の扱いの中で述べたが，特に見出しの場合この傾向が強い。

2月8日　（原文は縦組み）

発見遺体43人に　　全日空機

右エンジンは見えず　　徹夜の捜索

1）全日空機徹夜の捜索

2）発見遺体43人に

3）右エンジンは見えず

因果関係を伴った理由の説明からすると原文の順序はくずれ，およそ次の例の解釈が妥当であろう。2)，3)は1)の結果としての性格を持ち，2)，3)の理由となる。（厳密には２月６日の記事「全日空機遭難　遺体捜索を強化」に続いており，この結果としての意味もある。）さらに２月９日の見出しより，

4）全日空機の遺体収容

5）きょう完了を目ざす

6）機体状況，ほぼ判明

7）各部，東方に向い散乱

この場合，見出しの順序はくずれていないが，4)，5)は6)の理由であり，7)は6)の状況説と解釈される。また前日の見出しとの関係では，2)に対して4)，5)は理由となり，3)に対し6)が同様　理由となっている。これをさきほどの表１の８日，９日の項目と比較した場合，

８日　　発見遺体（３）

９日　　全日空機の遺体収容（２），各部，東方に向い散乱（２）

共に遺体関係の要素であり，記事全体の流れからみて一応は完全ではないにしても意味の一致点が得られる。

§３　分類上の問題点２

５Ｗ１Ｈに分類する過程において，文脈によって二重の性質を持つ可能性があることは前にも述べたが，ここではさらに具体的に問題となる項目をあげてみる。通常の分類では what は「物または事がら」として処理されるが，物または事がらという点から考えた場合，「物」とは何か，人，また場所における固有の名前，いわゆる固有名詞の問題，それらの定義と解釈の方法とが必要となる。５Ｗ１Ｈのうち固有名詞性格を持つものは who，where，what の三つの

表2

リード文	WHEN	WHERE	WHO	WHAT 1	WHAT 2	HOW
1	4日午後7時1分	羽田沖		全日空機		消息を断った
2			高橋機長ら133人の乗客	同機		乗っていた
3	同7時半		運輸省東京航空保安事務所		救難体制	発令
			運輸省～（＊＊）		捜索	設け
	同11時すぎ	東南東14キロ付近	捜索にあたっていた船舶（＊）	機体の一部座席		発見
					墜落	確認
4				遺体		発見切容
			133人			全員絶望
5	3日から始まった		126人団体客		札幌名物雪まつり	多かった

（＊）は分類上問題があると思われるもの
（＊＊）運輸省，海上保安庁，防衛庁，警視庁，米軍，全日空など

部分であるが，逆に必ずしも固有の名称を持つものが物的な実体，また対象に対する名称の間に一対一の対応づけが成立するとは言いきれない。例えば，ある集合体を表わす場合，従来の習慣では物的な扱いが行なわれてきたが，「大

日本帝国陸軍」，「関八州」等ある要素を持った集合体につけられた名称である場合，その対象は要素にあるのか，それとも集合それ自体にあるのか非常に曖昧さを伴ったものとなる。このため，むしろこれらの意味の領域の広がりは文脈の中で比較的自由度の高い使われ方を可能にする。リード文中の例としては，「救難調整本部」「運輸省東京航空保安事務所」等の集合体の名称に対して，これを who（人）とするか，what（物）として扱うかの問題が生じてこよう。

「事がら」としての動作の過程の捉え方，またそれらが文脈の中でどのように解釈されるべきかということは，物そのものの認識の方法と切り離して処理することはできない点が多い。これらを前述の例と同様2月5日のリード文について考えてみる。表2にその分類結果を示してある。

従来の Kwic システムによる分析のやり方が通常の日本文にどの程度応用可能か，またどの程度まで分析の道具として耐えられるか対象が広がってくるにつれて問題となるであろう。

KWIC そのものはＩＢＭのルーン（H.P.Luhn）の発案による情報検索での書誌検索に用いられる Computer の性質を有効に利用した方法であるが，（いわゆる同音同形異語を省くための方法として）検索のための第一となる語について，前後の文脈からできる様な構成となっているため，Computer 利用の拡大と共に従来の文法研究の中にもこの方法が利用される様になってきている

1)KWIC の利用対象が情報検索のために提案された方法であること。

2)対象となる資料は論文タイトルまたはそれに準じたものであること。

3)最初の使用の対象が英文で書かれた論文であったこと。

ここで主に問題となるのは，2)，3)の二つである。まず2)のKWICを日本文についても利用しようとする場合，従来の文法研究と同様の利用方法で，一文の範囲内で使うならばあまり問題はおきないであろうが，しかし日本文の場合，英文の構造と非常に異っており，主語の省略現象が，かなり多い。むしろ主語＋述語の形式を持っている場合の方が少いと言えよう。

しかし同じ日本文であっても論文の場合は主体となるものが比較的はっきりしているため通常文ほど問題とはならないとしても，この方法をそのまま意味

分析まで利用するとなると日本語の場合，主語の省略によって指示されたものと，するものとが前出の文にまで関係がおよび，一センテンス間での処理は，ほとんど不可能となってくる。文脈の中で明らかになるのは一センテンス中での単語の「あいまいさ」を省くのみであり，語そのものの性質は一センテンス内での用法でしかない。

単語の意味が文脈の中で決定されるならば，任意の単語の集まりからなるセンテンス自体もそれ自身が属する文の中でその意味が決定されるということが重要である。これは「意味」という語は何を対象としているかによって複数の意味を持つことがあるためである。ここでは，whyを示す場合と他のwho, where, what, how を表わす場合では，意味の単位が各々に異ったレベルになり，一義的には同一レベルの語形，または意味単位に固定化することはできない。表記の主語とインプリシットな背景にある主語の問題として語そのものは文中で使用される以外に，読む人またそれらを書いたであろう人の問題提起の手順が含まれており，通常それらはある事件または出来事について語るとき，時間の経過と共に言語の要素となる話題は暗黙の了解事項として処理される。これは当然ある事件がおきて紙上にニュースとして報道される場合，読み手においても最低の知識（事件そのものの詳細なもの）または関係づけるだけの能力を前提にしていると考えてよいであろうと思われるからである。

§4　結び

以上で新聞を資料とした見出し，リード文の構造の説明を終える。力たらずのため，最初の目的であった圧縮性の問題については分類上の問題を模索するにとどまった。また，表現についてもポイント指定の字形，かこみ等見出しをたてるために無視できないものが多い。本稿では，主に方法論的にモデル化への方向を述べてきたが，この一例をもって事件報道のパターンが他と，どの程度まで類似が得られるか疑問が多い。妥当性の確認を他の事件を対象として分析する必要があろう。また見出しと記事の圧縮性については自動抄録等 Computer を利用した自動化の研究と共通部分が多い。これは，記事の構文，文法等と関連する分野の分析が将来の語彙調査のある側面を表わしていると思わ

れる。また従来の分析の観点と異なるものとして，見出し表現の背後関係に焦点をあわせようとすると，「事がら」の調査としての意味あいが強くなる。これを事件に対し読み手が持つ認識と見ることが可能ならば意味そのものの問題として扱うことができよう。同時に，二つの文の結合によって各々単一の文意を含みつつも第三の意味が最っとも重要な部分としてある様に思われる。この点も今後の問題として処理していきたい。

参考文献

1)岩淵他編集　現代国語学II　昭和32年　筑摩書房
2)波多野完治　現代文章心理学　昭和41年　大日本図書